

## 永遠の少年の夢かなう——トンボの聖地ついに再生

### 1. 国破れて山河有—大地は瑞々しく輝いていた

1950（昭和25）年5月

ハイキングコースを外れて、藪の後ろ側に入ってアッとおどろき、立ち尽くしてしまった。なんと、すごい数のトンボが飛んでいた！

崖上の山を越えた太陽が照り始めると、何百か何千か、とにかく無数のトンボが、藍色の崖を背に、金色に煌めいて飛ぶのだった。右に、左に、上に、下に、浮き、沈み、宙返りしたり、止まったり、日陰に入ると金の輝きを失って、平凡なトンボになってしまう。

蝶のように幅広い青紫の羽のチョウトンボ、真赤な胴のショウジョウトンボ、黒に白い輪のコシアキトンボ。時々、黒と緑の縞のオオオニヤンマが、ブルンブルン、わがもの顔で飛びまわり、何か虫をくわえて去ることもあった。勇壮というか、光と羽の乱舞というか、あっけにとられてしまった。

崖下は湿原となって、イネ科の草が茂って黄の花が点々と咲いていた。草花の間、所々に水面がのぞいている。そこにもトンボがやってきて、お尻を水面にツイツイとタッチしている。水色やオレンジ色のイトトンボが草にとまってハート型につがったり……。

「アレ？」

草から草へ、ヒラ、ラララッ……、円弧を描いて飛んだのがいる。ひと飛びせいぜい二羽。別の所でもヒラ、ラララッ、なよなよとした飛び方だ。目と鼻の先に止まったそれをしげしげと見つめた！それがトンボの仲間と確信するには時間を要した。指先でふれようとした瞬間、ツイっと、飛びはなれる。

「かわいいなあ。トンボの赤ちゃん。こんなトンボがいるなんて！」

オスはまっ赤な胴、メスは麦わら色。出会いは小学5年、10歳になった5月末。日本一小さなハッチョウトンボ。全長が一円玉に収まるほど小さく局所的にしか発生しない絶滅危惧種である。

夏休み明けに昆虫展示箱を出した。図鑑に載っていないために「和名不明」と書いて。その夜、理科の先生が飛んできた。

「あのトンボ、どこで捕った！この町じゃ初めて！大発見だよ」

先生は、物差しを当ててパチパチ写真を撮った。数日後、宮崎日日新聞に載った。以来、毎年逢いに行った。

### 2. 戦後復興とともに壊滅

1955（昭和30）年ごろ

食糧増産のかけ声とともに、湿原はかき混ぜられて稲が植えられ、劇薬のホリドールがまかれて生き物は全滅した。湿原なので米は実らず、次は杉が植わった。それを悲しみの内に見届けた少年は1959年3月、ふる里を後にした。

### 3. 高度経済成長とジャングル化

杉も同じ理由でダメ。放置されてジャングル化し、今日に至る。

### 4. あの日の復元を夢見続けた永遠の少年たち

あの少年は国内外を転々とする仕事について忘れることはなかった。故郷との縁も細々と続き、親友と共に小型飛行機でジャングルを空から観察したことも、やぶ蚊に刺され、マムシを警戒して探検したこともあった(写真)。昼なお暗いジャングルの、わずかに届く木漏れ日のなか、まるで水辺の聖者のように羽を開閉するハグロトンボ(写真)。生存するトンボはそれだけ。まさに死せる聖地と化していた。

「もう一度逢いたい」その夢をあきらめかけていた矢先、熱意に応えるかのように、突如、土地の譲り渡しの話が親友に飛び込んできた。神は見捨てなかった。所有権移登記が終わった。最初の発見から67年が経過していた。

### 5. トンボの聖地復元・起工式の挙行

夢を共有した数名があつまり、現地でささやかな起工式が行われる日もまぢかい。平成最後の年、30年12月XX日。喜寿をすぎたあの日の少年は、(サムエル・ウルマンの)青春の詩の心を次世代につなぐ夢を追い続ける。

### 6. 秋津洲列島への夢

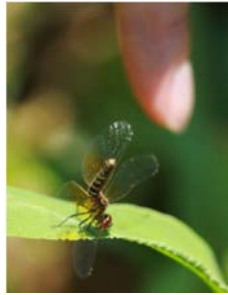
生態学、民俗学の梅棹忠夫博士は、小学生のころ、学業そっちのけで昆虫採集に明け暮れた。だから神童でもなんでもなかったと。心理学者の養老孟司先生は現在もなお昆虫採集を続けている。

このように、幼少期の昆虫や植物採集は、直接、生命の神秘に触れる機会を与え、時に生涯に亘る情熱を育てる。子どもが育つ環境が劣悪化した今日、今回の復元工事を契機に、全国津々浦々に、トンボの聖地、ビオトープの復元、新設を呼びかけていきたい。

●仕様は簡単。農薬の影響がない上流域の、小川の水を引いたりして、小さな水たまりをつくる。●トンボ、チョウ、その他多くの生き物がやってくる。●子どもたちは嬉々として昆虫採集に夢中になる。

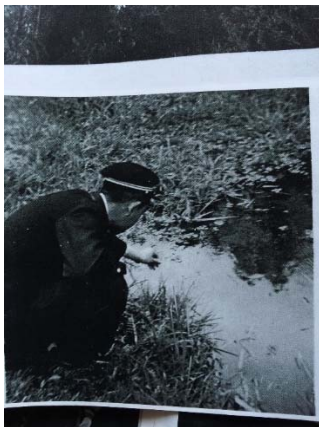
●漫然と採集するのではなく、一種ずつ名前を覚え展翅版にて標本をつくる。  
●最低限、先生はそのことを教えねばならない。  
●生涯持続する情熱を灯す導火線はそれだけだ。

### ハッチョウトンボの写真



左♂ 右♀ 小林市 野尻：薦田氏撮影

### トンボの聖地 ↓



S.30年ごろ。対面の藪の向こう側が大淀川支川の浜の瀬川（陰陽石はすぐ下流）

### 復元のための現地踏査 ↓



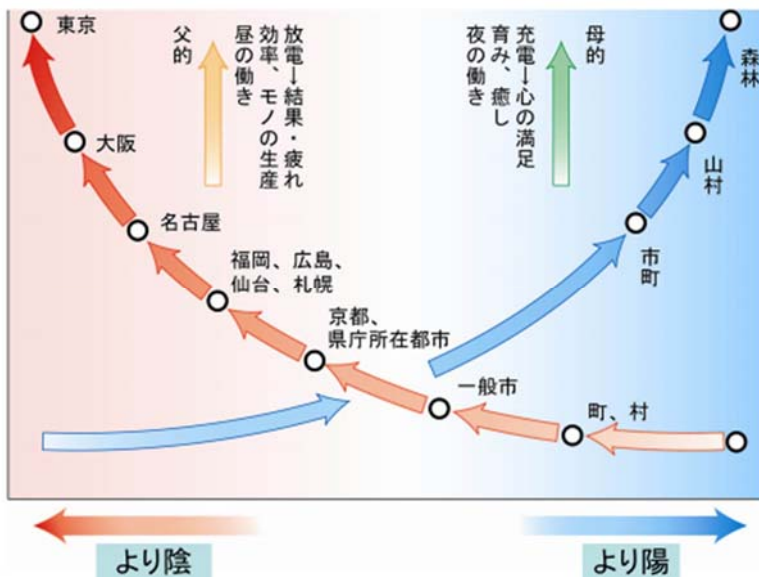
2016年8月6日、筆者写す。ジャングル化して昼なお暗い。



通常の水量（東崖の下からにじみ出る）。

↑ハグロトンボの出現地

### 参考図



### 参考図の説明

- 上図にて、国土には母性系土地と父性系土地があることを示した。
- 母性系では、主として再生産機能を担い、父性系では、生産機能を担う。
- 現在の日本は、母性系の土地へのいたわりが少ない。少子化もその文脈で起こっている……。
- もっともっと母性系の土地＝鄙を大切にしたい。